

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24500723

研究課題名(和文) スポーツ競争に拡大体験の地平を探る意味生成論の展開

研究課題名(英文) Developing discussion on semantic generation exploring the horizon of the expanding experience in sport competition

研究代表者

深澤 浩洋 (FUKASAWA, Koyo)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：50313432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツにおける競争という一見他者との対立や隔離を誘発する様相において、拡大体験が成立する地平を探ると共にその教育的意義を明らかとすることが目的である。拡大体験は競技者間に発生する非人称性を伴った溶解体験を対象化することで生ずる経験であり、競技者同士が完全にはコントロールできない他者性を帯びている。この経験を媒介として相互尊敬の念が生じる可能性が見出される。これは、スポーツが有する教育的意義の一つであるが、それを目的に教育プログラムを構築するのは、相互尊敬が偶発的に起こるがゆえに困難であり、その条件や環境を整えることが肝要である。また、相互尊敬の念を確認する指導者の共感力の涵養も重要である。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explore the horizon where the expanding experience emerges among athletes, and to clarify its educational significance, in the phase, that is competition in sport, which provokes antagonism or separation of others. The expanding experience is the experience emerged by objectifying the dissolving experience among athletes, which is accompanied by an impersonal nature because the dissolving experience takes on the otherness which no athletes can control completely. We can find the possibility to generate the feeling of mutual respect among athletes through this experience. This is an educational significance which sports activities pregnant as a possibility. But the constituting the education program aiming to provoke the feeling of mutual respect would be difficult because of its contingency. It is important to create a condition and an environment for generating the feeling, and to foster the capacity of educator or coach for empathy to feel the mutual respect.

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：純粹経験 溶解体験 私-汝 感覚 知覚 共感 尊敬

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 社会的背景

現代社会において、競争社会という特徴は、社会のグローバル化に伴う企業の世界進出、競争力の強化の要求という形で、スポーツ界のみならず教育や経済の場にもみることができる。一方で我が国の若者の現状はというと、留学生数の伸び悩みや企業での転職率の高さに見られるように、競争に背を向けているかの如き状況である。スポーツに目を転じてみると、幼少期からスポーツに取り組ませる熱心な保護者のいる家庭の子どもたちは、いわば投資の対象としてスポーツにおける競争状態に晒され続け、不幸なことにバーンアウトに陥るケースも散見される。競争が常に不安を誘発するからであるとの説明もある。

要するに、子どもたちの間には競争にさらされる子どもと競争から遠ざかる子どもという二極化がみられるのである。競争という人間社会特有のあり方に対し、勝利至上主義の誘因やスポーツに対する無批判的な礼賛ならびにその逆の立場からの安易な批判という形で見方を誤れば、教育への適切な導入の妨げにもなりかねない。もちろん、それは体育におけるスポーツ教材の取扱い方にも反省を促す論点となるであろう。競争が有する正負の両側面を見極める上でも、あるいは、適切なスポーツ振興政策を打ち出すためにも、スポーツ競争に新たな意義を見出す必要があると考える。

### (2) 学術的背景

本研究においては、勝利至上主義の限界認識に基づき、成果主義や優勝劣敗の価値観からの脱却を図ると同時にスポーツ競争がもつそれ以外の側面・可能性を見出すことをねらった。

その手がかりの一つが、スポーツ体験の意味生成論である。意味生成体験としての溶解体験に関しては、久保正秋が、手からボールが離れていく心地よい感覚(エロスの体験)や、日常動作に基づいてプレイしようとする際に体験されるぎこちない動きの感覚(タナトスの体験)にそれを見出している。これは、スポーツ活動を通じて技能として何ができたか、どれだけのパフォーマンスを発揮できたか、試合で勝ったか負けたかをみて評価するような発達としての教育観とは異なり、スポーツ活動において子どもたちが何を体験し、自己変容が引き起こされたのかを重視する生成としての教育観から見出されるスポーツの側面である。

また、本研究代表者の行なった研究の成果(2008~2010年度基盤研究(C))からは、スポーツ競争に参加する各プレイヤーの視点を他者に引き写すことによって拡大体験が生ずる可能性が示唆された。しかしながら、自己と他者とを結ぶ存在基盤に関しては、さらなる探究が必要であると考えられる。

また、競争状態にありながら、競争を超えた境地とはどういうものなのか、という点に関しては、日本における剣術、禅、武道の精神が参照点となる。西洋におけるそうした関心を示した最近の研究には、剣術における無心とピークパフォーマンス、フロー体験との異同を見極めようとする動きがみられる。その境地がスポーツにおける競争にも見出せるとしたら、それは洋の東西を問わず有意義な体験として考えることができるだろう。

以上の研究は、競争社会の限界という示唆を受けて考察が展開されているものと推察される。

## 2. 研究の目的

本研究は、次の三つの課題に取り組み、スポーツ競争の新たな意義とそれをもたらす基盤を見出すとともに、スポーツ教育への示唆を試みるものである。そのために、次の3つの研究課題を設定する。

(1) スポーツ競争における拡大体験の様相を同定する。

(2) 拡大体験の発生メカニズムを探究し、参加者が共に存立する基盤を解明する。

(3) 拡大体験の生成モデルを構築し、スポーツ教育における教育的価値や目標・評価論への導入可能性を探る。

## 3. 研究の方法

まず、スポーツ競争における拡大体験の様相を確認するために(上記1)、その意味や概念を同定する。そこから、対人競技、競走競技、チーム競技等タイプ別に拡大体験について検討する。次に、拡大体験の契機を同定するために(上記2)、西田幾多郎の論考を手がかりとして考察を進める。ここで見出される諸概念に基づき、(上記3)に向けて、スポーツの教育的価値を探るとともに、スポーツ教育への適用を試みるために、目的・目標論ならびに評価論を吟味する。

## 4. 研究成果

### (1) 競技者同士に起こる拡大体験の様相

拡大体験とは、相互作用する人と人との間で起こり、集団所属感を経験しながら自己がその集団の境界まで拡張するという作田啓一が提示する体験である。すなわち、自己の範囲があたかも他者をも含んで拡大するような体験であり、俗に言う「われわれ」としての意識や同胞意識などにみられる。スポーツで生ずる拡大体験としては、例えば、チームスポーツにおいて自己とチームとが一体化するような体験にみることができる。

これに対し、スポーツにおいて競争という一見他者との対立や隔離を誘発する様相において、参加者同士に拡大体験が成立する地平がいかんして成立しうるか。この問いについて、競技者個人の体験やその思索に関連する記述の解釈を試みた。その結果、柔道でほとんど力を入れずに相手を投げることがで

きる瞬間や、マラソンで相手の心身の状態をつかめた瞬間に体験される状態を拡大体験の事例として同定することができた。

### (2) 拡大体験の解釈に向けた溶解体験

拡大体験の基盤を自己と他者とで共有する様相を明らかにすべく、西田幾多郎の「善の研究」、「私と汝」などに関する文献調査を元に解説、考察を行った。その結果、まず、西田の主要概念の一つである「純粹経験」から、これが、行為主体が何らかの対象と主客合一する経験であることを確認した。それとともに、この純粹経験が溶解体験としてみなされた。この溶解体験は、競争相手同士は、どちらがどちらを制したのか、制されたのが判然とせず、あたかも自己と他者が融合したかのような体験と考えられる。よって、自他の区別がなく、また、この体験は、自己や他者にとっても他者性を帯びている。

この他者性を帯びた体験について、西田の言う「底」の解釈を通して考察した。西田の「私と汝」という論考によれば、自他の境界が消失する境地というものが、自己の底の底を見つめる過程に見出されるといふ。この底は完全に自己のものでないし、他者のものでないが、自己と他者とが共有する可能性を持つものである。溶解体験との共通性がこのような事態にみられることを確認した。これら「純粹経験」と「自他の問題」を踏まえて競技スポーツにおける共感の可能性へ適用できることを確認した。

上述のような例で体験される共感に純粹経験との相似性が認められること、また、これを通して自他の区別がより自覚化されることが、一つの解釈として得られた。

### (3) 拡大体験から拡大経験へ

体験と経験との関係や相違について改めて確認・検討作業を遂行した。その結果、主客未分化の状況において生ずる認識やその変化を体験、その体験を対象化することで主客が分化した状態で認識されるものを経験として、「体験」と「経験」との相違を意味づけることができた。そして、経験の相においてはじめて我と汝との関係が位置づけられる可能性を検討した。この両者の結びつきの鍵を握っているのが共感 empathy である。これによって我と汝とが完全に独立した2つの存在というわけではなく、また両者が混在した存在というわけでもなく関係づけられることを示した。そして、共感を伴う人格同士の関係において、従来呼ばれていた拡大体験は、むしろ拡大経験として表現されるべきという関係を導いた。拡大体験とは、この他者性を帯びた溶解体験を対象化することによって成立する。

### (4) 教育的価値としての尊敬とその基盤となる共感 Empathy

そこからさらに、経験の一例として競争に

おいては相手のことを克服すべき相手として捉えがちになる中で、競技においてもなお相互尊重が成立するための要因に関する検討課題が浮かび上がった。これは、競技スポーツに教育的な意義を見出す上で一つの重要な具体例となることから、教育モデル構築の試みを進める前段階として、また、具体的な涵養の目標を見定める上でもこの検討を研究課題の一つに位置づけた。尊敬を感情と捉えるカントの独特な見解の解釈を行い、崇高の概念が考察の重要な手がかりとなる可能性を見出した。そして、競技の場合、相互尊敬にその特徴が表れてくるのではないかと仮説のもと、身体的な体験や共感から経験への変位で何が生じているか、という点を考察のポイントとして見定めた。また、スポーツ競技における拡大経験の教育的意義を探究することを目的として、競技者の相互尊重に着目し、拡大経験と関連づけながら検討を行った。

ボルノー<sup>10</sup>の著作を中心に検討した結果、尊敬とは、受動的な感情（愛情や憎悪など）とは異なり、理性概念によって自ら作り出された感情として、人間の理性的性格に根拠づけられ、教育的影響による人為的な喚起を要するものであることが導かれた。競技者が勝利や高度なパフォーマンスの発揮を目指し、時に苦痛を覚え、それでもなおルールの範囲内で努力する様子は、理性的な理解を伴って尊敬の感情を引き起こす。自身と同じ法則に支配されているとみなすことによる平等の承認が尊敬の可能性にとっての前提となることから、このことは支持される。さらに、競争相手から感ずる予想以上の力や意思に畏敬の念さえ覚えることもあるだろう。

畏敬の念は、傷つきやすいものや脆いものに身を晒す様子を理解した時に生ずるものであることから、その例として、競技者が勝利を収めようとして、破ってしまいかねないスポーツのルールや、苦しさから逃れたいと思ひ、楽な方向へと向かう傾向に打ち勝とうとする様に注目した。それでもなお努力する競技者の姿、観る者の予想を超えた努力に畏敬の念が生ずる可能性を考察した。こうした自身の予想を超えた他者やルールのような、自身からは自由にならない他者との接触が教育的な影響をもたらすことを確認した。

以上のように、拡大経験を経ることにより、相互尊重へと変容する可能性が示唆された。共に競技に参加し、相手の感じ方や思いを推察できるからこそ、お互いに了解する可能性が生まれ、そこから相互の尊敬が生み出されることが明らかとなった。

スポーツ競技における拡大経験を基盤として発生する可能性のある相互尊重とその発生機序に関する検討結果は次のとおりである。まず、スポーツ競技を通して発生する尊敬の念と、一般的な尊敬の念との違いについて、競技者が自身に対して自己認識し、そのパフォーマンス発揮の努力ならびに単眼

構造・複眼構造をベースにその論理構造の解釈を試みた。単眼構造をもつ感覚は必ずしも私秘性や一人称権威を導くものではない、すなわち他人から全くわからないものではなく、この点に共感の可能性が開かれてくることを文献解釈により確認した。また、感覚に関しては競技者同士に完全な一致を見出すことは不可能である(それ故自己と他者という人称の基礎となりうる)が、複眼構造をもつ知覚であれば、スポーツ経験を通して得られる感覚に対し、そこで対象化されたものの知覚を自他共に共有する可能性が導かれる。

こうした感覚を誘発するものを溶解体験に見出すことができた。そして、それが反省的に知覚対象に転じたときに拡大経験が生起することを見出した。一方が他方に対して一方的に尊敬の念を抱くのではなく、相互に尊敬ないし尊重するためには、こうした共感を契機とした拡大経験の成立が重要である。したがって、相手を凌駕しようと努力するために競争相手に生じた感覚や知覚を共有しない限り尊敬の念が抱かれることはなく、その意味で溶解体験や拡大経験が果たす役割は大きいといえる。

スポーツ競技で生じうる相互尊敬の念という教育的にも価値のある状態に至るには、身体を介した共感が前提にある。そうした共感を可能にする身体の育成が教育目的の一つに位置づけられる。それが数量的評価に馴染むものでないのは言うまでもなく、スポーツ実践者の反省的な記述や実践の様子を観察する教師が実践者の振る舞いに共感することが重要になる。また、そのような資質を育むことは、教師教育の目標に位置づけられることになる。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

深澤浩洋: スポーツにおける拡大経験の意味づけ: 知覚 - 感覚論と自他の関係性をめぐって. 体育・スポーツ哲学研究, 38(2), 117-132. 査読有. 2016.

[http://doi.org/10.9772/jpspe.38.2\\_117](http://doi.org/10.9772/jpspe.38.2_117)

FUKASAWA, Koyo: The Potentiality of Empathy with Others in Competitive Sport: A Suggestion from Nishida's 'Pure Experience' and 'I' and 'Thou'. International Journal of Sport and Health Science, 12:47-52. 査読有. 2014.

<http://doi.org/10.5432/ijshs.201401>

FUKASAWA, Koyo: The Background and Condition for Respect in Athletics from the Viewpoints of Kant's Notions, 運動文化研究, 25:9-26. 査読有. 2014.

[学会発表](計8件)

FUKASAWA, Koyo: What Experience in Competitive Sports Generates a Sense of Respect? 43rd Annual Conference of

International Association for Philosophy of Sport, Cardiff, U.K. 2015.9.4.

深澤浩洋: 競技スポーツにおける尊敬の意義とそれを生み出す経験. 日本体育・スポーツ哲学会第37回大会, 愛知教育大学(愛知県刈谷市), 2015年8月18日.

FUKASAWA, Koyo: The Potentiality of Respect in Athletics and Limit of Imagination. 国際運動哲学學術研討會, 台北市, 台湾, 2014年11月22日.

深澤浩洋: スポーツにおける拡大体験へのアプローチ - 西田の身体観を手がかりに. 日本体育学会第64回大会, 立命館大学(滋賀県草津市), 2013年8月30日.

FUKASAWA, Koyo: The Expanding Experience in Sport Activity: From the View of Body by Nishida, K. The 25th International Sport Science Congress of KASPERD, ソウル市, 韓国, 2013年8月22日.

FUKASAWA, Koyo: A Basis of the Interconnection of Athletes in Interpersonal Athletics: Considering Nishida's 'I-Thou' Relationship. XXIII World Congress of Philosophy, Athens, Greece, 2013年8月10日.

深澤浩洋: 競技スポーツにおける他者との共感の可能性 - 西田幾多郎の『私と汝』『純粹経験』からの示唆, Philologos 研究会, 筑波大学(茨城県つくば市), 2012年11月30日.

FUKASAWA, Koyo: What is Shared among Athletes through the Expanding Experience in Competitive Sport? A Consideration of Individual Athletics and Interpersonal Athletics, 40th Annual Conference of International Association for Philosophy of Sport, Porto, Portugal, 2012.9.15.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 浩洋 (FUKASAWA, Koyo)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 50313432